慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	W. ディルタイにおけるPhantasieとEinbildungskraft
Sub Title	Phantasie und Einbildungskraft bei W. Dilthey
Author	鵜殿, 博喜(Udono, Hiroki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.81, (2001. 12) ,p.108(305)- 124(289)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	宮下啓三教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00810001-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

W. ディルタイにおける Phantasie と Einbildungskraft

鵜殿　博喜

1．序

「18世紀の後半からこのかた，ファンタジー（Phantasie），イマジネーション（Imagination），想像力（Einbildungskraft），あるいはそれ以外のどのような名称であろうと，そのようなものが文学創作の中心的役割を果たしている，という考え方が主流である」[1]という見方が正しければ，ディルタイがエッセイ風論文集『体験と創作』に収載した『ゲーテと詩的ファンタジー』という論文や，あるいは『詩的想像力と狂気』や『詩人の想像力。詩学への寄与』のなかで，詩的想像力や詩的ファンタジーについて論じているのは，ディルタイにいたるまでの100年以上にわたる文学論の伝統に連なってのことと考えられなくもない。

しかし，「19世紀の60年代に突如ファンタジー概念に大きな関心が集まるようになった原因はどのようなものか」[2]という問いに対して，重要な原因の一つとしてリアリズム文学の隆盛が挙げられ，それまで自由を謳歌していたファンタジーはここにいたって，厳密な探究の俎上にのせられることになった。つまり，「リアリズム文学の登場によって，詩人の想像力が問題にならざるをえなかった。というのは，作家はすべての社会階層を忠実に写しとるよう求められ，また自身写しとりたいと思う場合，どこにファンタジーの自由が残っているか，ファンタジーはそもそもまだ可能なのかと問われたから」[3]である。このような文学状況のなかで，ディルタイがあるいはフロイトが想像力について精力的に論及しているということ

は，文学の世界におけるファンタジーの伝統とはまた異なった問題意識に基づいてのことにちがいない。

1．ディルタイの危機感

ディルタイは1887年に発表した『詩人の想像力。詩学への寄与』(Die Einbildungskraft des Dichters. Bausteine für eine Poetik）の冒頭で，アリストテレスからゲーテ，シラーの詩学までをざっと辿り，「こんにちでは，あらゆる国で，文学の幅広い分野がアナーキー状態になっている。アリストテレスによってつくられた詩学は死んだ」[4]と述べている。つまり，文学創作および文学享受にさいしての規範が消滅してしまったという認識である。さらにディルタイはつづけて言う，「このアナーキーな状態で芸術家は規則に見離され，批評家は価値を決める基準としてただ一つ残っている個人的感情へと押し戻されている。巨大な展覧会場や大小種類を問わぬさまざまな劇場や貸出図書館に押し寄せる大衆が，芸術家の評価の鍵をにぎっている」[5]。19世紀ににわかに勃興した大衆化の時代。一方で規範のないまま芸術作品が生産され，一方で大衆の趣味が芸術の価値を決める時代。そのようなディルタイの時代認識は危機感へと変わり，ここでなんとかみずからの手で新しい詩学を打ち建てたいという志でこの論文は書かれたと言ってよいだろう。「このような趣味のアナーキー状態は，つねに，現実を感じる新しい方法が既存の形式と規則を打破し，いまや芸術の新しい形式が開花せんとする時代を示している。しかしそのようなアナーキーはけっして長くつづいてはならない。そして美的思惟と芸術の健全な関係を回復させることがこんにちの哲学と芸術史・文学史の生きた課題の一つである」[6]。

ディルタイはみずからに負った新しい詩学の創設という課題に立ち向かっていくわけであるが，そのためにまず詩学の中心問題を考える。「創作する詩人の役に立ち，読者の判断を導き，美学批評や文学研究にゆるぎない拠り所をあたえることが詩学に求められているならば，詩学の中心的問題，すなわち普遍妥当性なのかあるいは趣味判断や美の概念や技法や技法

の規則といったことの歴史的変遷なのかという問題に答えなければならない」[7]。つまり普遍性なのか歴史性なのかという問題に詩学は答えなければならないというのである。

ディルタイの詩学問題についての認識は，「どんな経験的，比較的方法も過去からしか規則を引き出すことができないし，その規則の妥当性はそれゆえ歴史的に限定されていて，そういう規則は新しさ，将来性の豊かさを見いだしたり評価したりすることはけっしてできない。こういう規則は後ろ向きで，未来の法則を含みもたない。昔の文学の規範的価値が崩れて以来，人間の本性（Natur）からしか美の法則とポエジーの規則を導き出すことはできない。……いまや詩学は確たる点を心的生のうちに求めなければならない」[8]というものである。このようにして詩学の問題は心的生といういささかやっかいなレベルに移された。なぜやっかいかといえば，心的生とはまさに捉えどころのない世界と思われるからだ。しかしディルタイはこの心的生という世界で営まれる詩的創造の秘密に迫ろうとする。そのとき重要な概念として用いられるのが，Phantasie であり Einbildungskraft である。

2．ディルタイの想像力論—『詩的想像力と狂気』

ディルタイは1886年8月，ベルリンにある軍医養成学校の設立記念日に招かれ，『詩的想像力と狂気』（Dichterische Einbildungskraft und Wahnsinn）という題で講演した。これは『詩人の想像力。詩学への寄与』を発表した年の前年にあたる。また『体験と創作』に収められた『ゲーテと詩的ファンタジー』の最初の稿が発表されたのが1877年である。つまりこのころディルタイは精力的に想像力の問題を考えていたわけである。

この講演のなかでディルタイは，まず，狂気と想像力の類似性について，「昔の人びとはすでに，詩人の想像力と夢，幻覚，妄想の類似性を観察してきた」[9]として，デモクリトスからショーペンハウアーまでの例を挙げ，またフランスでの精神医学理論に言及しながら，「わたしは，夢想者，催眠状態の人，狂人と，芸術家あるいは詩人との共通点を，現実の制

約にとらわれない，イメージの自由な造形とイメージの結合とする」[10]と述べている。これについてダンテ，ミルトン，ルソーなどの例を挙げて説明しながら，今度は相違点に言及していく。ここからがディルタイ独自の想像力論になる。「わたしはいまやこう言いたい，これら相互に類似性のある作用は，夢想者，狂人，催眠状態の人においては，芸術家あるいは詩人の場合とはまったく異なった種類の原因によって生み出されるのだと。心的生の最高のもっとも難しいはたらきは，心的生の獲得された連関（den erworbenen Zusammenhang des Seelenlebens）をまさに意識の向かう先にある知覚（Wahrnehmungen）や表象（Vorstellungen）や状態（Zustände）へと作用させることである。この心的生のはたらきは夢や狂気のなかでは機能を停止する。それでこの場合は，現実に適応するときに印象（Eindrücke）や観念（Vorstellungen）や感情（Gefühle）を得る調整装置のようなものがはたらかない。だからイメージが好き勝手に活動をやめたりくっつき合ったりする。それにたいして，詩人の想像力においてはこの連関がはたらく。それで結果的に感情，熱情，感覚器官の例外的なエネルギーだけが現実の境界を越えてイメージを自由に展開させるということになる。天才は病的な現象ではなく，健全な人間，完全無欠な人間である」[11]。キーワードは〈心的生の獲得された連関〉である。この言葉はのちのディルタイの文学論のなかでも重要な役割をはたすことになるが，ディルタイは『詩的想像力と狂気』のなかでこの概念をはじめて使った。

〈心的生の獲得された連関〉とは，ディルタイによれば，「われわれの自己の生と，その生が呼吸し，悩み，行動する場である環境とのあいだの絶え間ない相互作用，これがわれわれの生である。この心的生の連関は，こんどは，意識の向かう先にある観念や状態にたいして影響をおよぼす。この連関は所有され，活動するが，意識されていない。この連関の構成要素は明確には表されておらず，はっきりとは分けられていない。構成要素同士の結合は識別できるほどには際立っていない。しかし意識のなかにある観念や状態はこの連関へと方向づけれており，この連関によって限定され，決定づけられ，築き上げられる。われわれはこの連関を漠然と所有し

ているが，この連関は熱情や印象を調整し制御する」[12]と説明される。つまり〈心的生の連関〉とは，われわれの心が外部から刺激され，その結果生じる感情や観念が放縦気ままに発露されるのではなく，それらを調整しながら表現させる機能を有するもの，ということになる。

ディルタイは『詩的想像力と狂気』のなかで，一見類似した現象であるこの両者を，〈心的生の連関〉の有無によってはっきり弁別した。そしてさらに加えて想像力に心理的法則があるのを見る。「詩的想像力によってできた作品には，心理的法則（psychologische Gesetze）がはたらいている。……想像力はこの合法則性をもって詩人のうちで作用するのであるから，想像力は典型的なもの（das Typische），理想主義的なもの（das Idealistische）を生みだす」[13]。ディルタイはこの心理的法則を，さまざまな文学的事例をもとに帰納的に考えて発見したようであるが，想像力の法則性はたちまち硬直化して一つのドグマになる危険性を孕んでいる。たとえばディルタイはこういう例を挙げる。「ファウスト，リチャード（三世），ハムレット，ドン・キホーテの本質的な部分はきっと繰り返されるであろう。新しいところでは，慎ましい若者ヴィルヘルム・マイスターかカッパーフィールドが，さりげない始まりから悪しき状況をくぐり抜けて生の自由へと登っていくさまが見られるであろう。つまりこれはなんといってもわれわれ現代のイーリアスとオデッセーなのだ。こういうことすべては必ずや繰り返されるであろう。なぜなら，どこででも同じ法則が想像力と人間の本性を支配しているからだ」[14]。つまりディルタイが発見したと思った心理的法則の裏には，ディルタイの特定の文学にたいする嗜好が隠されていると思えなくもないからだ。それは，「天才は健全な人間である」という表現とも通底しているように思われる。だから「健全であることの強調は，ディルタイがなぜゲーテやドイツ古典主義者一般を偏愛したのか，なぜ彼はシェイクスピアを敬い，リアリストたち，とりわけディケンズに—というのは，ディケンズは彼の意見によれば，バルザックのような人のペシミズムに侵されていなかったから—力を注ぎ，自然主義を批判したのか，の理由でもある」[15]というような批評がなされるのであろう。

3．ゲーテと詩的ファンタジー

『体験と創作』(Das Erlebnis und die Dichtung) のなかに収載された『ゲーテと詩的ファンタジー』(Goethe und die dichterische Phantasie) は，ディルタイのファンタジー観を考えるうえで重要である。このエッセー風論文は，1877年に「民族心理学雑誌」(Zeitschrift für Völkerpsychologie) に掲載されたのが最初で，それから30年近くたって，1905年に論文集の『体験と創作』に収められた。初版の序文によれば，この論文は修正と補足がなされたということであるが，この初版もまた，翌1906年にはすぐさま改訂され，その序文によれば，「わたしはこの第2版を，世界文学の視点でゲーテの性格づけをするために書き換え，拡張した。わたしはゲーテをこの書の中核にしようとした」[16]とのこと。「わたしは内的に連関する3つの論文を選び，この内的連関を完全にするために，ヘルダーリンについての論文をあらたに加えた」[17]と述べている初版の序文から第2版は一歩踏み出して，ゲーテ論文を要の位置に置いたわけである。これによってゲーテ論文は量的にもかなり大きなものになった。その後さらに亡くなる前年の1910年には改訂第3版が出版された。この第3版も修正が施されたが，それはもはや部分的なものにすぎない。この第3版が結局決定版となった。ちなみに第4版には，1912年10月の日付がついたG. M. というイニシャル名の短い序文が置かれている。おそらくディルタイの弟子のGeorg Mischであろう。その序文にはこう書かれている，「この新版は，ディルタイの死によって，前の版と切り離されている。1911年10月1日に彼は78歳の生涯を閉じた。彼の若き日の精神が息づくこの書物はもはや変えられることはない」[18]。

第2版以降には，初版にはなかった「詩的ファンタジー」という項目が加えられた。ということは，これはディルタイが晩年になってあらたに書き下ろした文章だということだ。つまりディルタイの詩的ファンタジー論のまとめのようなものと言えよう。そこでこの項目を中心に詩的ファンタジーの問題を考えてみたい。

論文の表題が「ゲーテと詩的ファンタジー」となっていて，表題のすぐあとにはゲーテのファンタジー讃歌の詩が置かれ，論文の冒頭は，「詩人のファンタジー，実体験や伝承されてきたものなどの素材とファンタジーの関係，過去の詩人たちの作品とファンタジーとの関係，この創造的ファンタジーの特有の形態，そしてそのようなファンタジーとの関連から生まれる文芸作品の特有の基本形態，これこそあらゆる文学史の中心である。近代のドイツの詩人のなかで，ゲーテほど創作にあたってファンタジーを中心にすえた人はいないし，作品の理解のためにはファンタジーの本質をしっかり洞察しなければならないと，ゲーテほど求めた人はいない」[19]と，ファンタジーの重要性が強調されているわりには，論文全体でファンタジーに言及されている分量はけっして多いとはいえない。むしろ論文集全体のタイトルである「体験と創作」がこの論文の中心的テーマであると言ったほうが，より内容にかなっている。ディルタイがこのゲーテ論文を論文集の要にした意味は，この論文の内容を見れば，首肯できる。とはいえ，ディルタイのいう体験はファンタジーとは無縁に考えられているわけではなく，ファンタジーの理解なくしては体験の理解もおぼつかなくなるであろう。

ディルタイはまず，「ファンタジーは人間の日常のいとなみとはまったく異なった不思議な現象のように見えるが，しかしそれはある種の人びとの人並みはずれた強力な構想力（Organisation）にすぎないのであり，一定の基本的プロセスのもつまれにみる強さがそのような構想力を生み出している」[20]と言って，ファンタジーと基本的プロセス（elementare Vorgänge）の関係を問題にする。ここでの基本的プロセスとは，あとで心的生の（des psychischen Lebens）基本的プロセスとも言われるもので，知覚（Wahrnehmung）から記憶（Gedächtnis）を経て再現（Reproduktion）にいたる経過を表す。ちなみに「心的生の連関」という場合の「心的生」は das seelische Leben であり，「心的生の基本的プロセス」のほうが心理学的臭いを強く感じさせる。それはともかく，心的生の基本的プロセスとファンタジーが関係ある以上，心的生の基本的プロセスとはなにか

を考えてみる必要があろう。

われわれがある対象を知覚するとき，対象はそのままの形で記憶に取り込まれるわけではない。とりわけ詩人の場合，「生活状況，気分，情熱が根源的な力をもって詩人の内で知覚による形成を促す」[21]。普通人の場合でも，「表象（Vorstellung）は意識するたびにおなじ姿で現れることはないと同様に，最初に意識されるときもそっくりそのままの形で再現されることはない」[22]。「知覚がひとたび表象に変わると，まだどれほど鮮明で明白な表象でも，記憶に残っている像には，知覚の過程に含まれている要素のほんの一部が表象されるにすぎない。そして，なにしろ機械的にしか記憶されないこの時点においてすでに，イメージの全体像をいきいきと甦らせようとすると，あとからイメージを形成しようとする試みがなされていることはまぎれもない事実である。しかし，知覚と表象のあいだに別のイメージが挾み込まれて，そうしていざ知覚したものを完全に呼び戻そうとすると，記憶のなかの表象はある内的な視点から構築される」[23]。「たいていの場合，ある種の知覚作用によって記憶のなかに瞬間的な像を結ぶような個々の印象を呼び戻そうとするのではなく，そのどれもが対象物を全面的に代表するような表象もしくは表象の結合を呼び戻そうとするのであるならば，そのような表象の構築はありきたりの再現といったものではなくて，芸術的な模倣の構築のほうにはるかに近づいている。要するに，記憶に基づかない想像力がないように，すでに想像力の側面を含みもたない記憶も存在しないのである。記憶を呼び戻すという行為は同時に記憶の変容でもある」[24]。

あるものを知覚し，それを記憶して，記憶したものを表象する。このプロセスには当然のことながら，さまざまな操作が入る。詩人ならずとも，知覚の段階ですでに，心的あるいは外的諸要因の影響を受ける。知覚したものが記憶されるとき，そこでつくられる「心象は，条件が同じであっても，人によって，明るさと強さ，感じ方と具体的なイメージの度合いがまったく異なっている。色もなければ音もない影のような表象から，目を閉じたときの視空間のなかで描くことのできる事物や人間の形態にいたるま

で，まったく異なった形が再現される」[25]。そして記憶したものを再現しようとするときもまた，表象は再構築される。対象は，あるがままに知覚され，記憶され，再現されるわけではない。そこで，このような心的生の基本的プロセスはどのような創造的成果を生み出すことになるのかということが問題になる。

ディルタイは，「詩人の文学的性質はすでに，知覚から記憶，記憶から再現という単純なプロセスのもつ力にはっきりと現れ，その力が，性格，運命，状況のイメージなどじつに多種多様なイメージを意識のなかで動かす。そのときわれわれは記憶それ自体に，想像力と似た性質があることを発見する。つまり，われわれの心のなかにあるイメージの生命のすみずみにまで変容が及ぶのである」[26]と言って，このプロセスの記憶のところに想像力と似た性質を見いだす。したがって，「記憶のなかで起こるイメージの変容とイメージ同士の連関の変容は，想像力に特有のイメージの形成過程を考えるうえでもっとも単純でそれゆえもっとも有益な事例」[27]となる。イメージの変容はじつにさまざまな形でおこなわれる。足したり引いたり，掛けたり割ったり，ときには無意識に，ときには恣意的に奔放に，このようにして無数の具体的な形象が生み出されていく。イメージで考えるということが起こり，過去のイメージが一新され，未来のイメージが構想される。これは想像力によるイメージの形成過程でもある。「このような一連のイメージの形成過程を生じさせる力は，生によって喜び，苦しみ，気分，情熱，意欲へとさまざまに揺れる心情の深みに由来する」[28]。つまり心情の深みから自由なファンタジーの展開による詩の創作へという流れが見られるということになる。イメージのさまざまな変容は想像力によるイメージ形成と重なり，それはファンタジーの特性そのものでもある。それではこのファンタジーの特性はどのようにして詩的ファンタジーになっていくのか。これがディルタイのつぎの問題意識である。

ディルタイはファンタジーのメカニズムと現実を覆い隠す心的行為を区別する。現実を覆い隠す心的行為とは，「日常のなかの，誕生，愛，死のような人生の大事は，昔からおこなわれているように，現実を覆い隠し，

現実から目をそらさせることによって美化される」[29]ということである。それにたいしてファンタジーは日常の世界とはちがう別の世界をつくりあげる。それは夢という形をとったり，あるいは遊びのなかで無意識的にもうひとつの別な世界をつくりあげる。宗教的ファンタジーも，宗教的な目的から離れていくと，日常とは別の世界だけが意義をもつようになる。このようなファンタジーの性質は詩的ファンタジーを考えるうえでの基本となる。

「詩的ファンタジーは，詩的世界の形成がおこなわれる心的プロセスの最高の精華である。この心的プロセスは，つねに体験と，体験をとおしてつくられた物事の理解の仕方の基本にもとづいている。詩的ファンタジーは生の状況に左右され，詩的ファンタジーを見れば，生の状況が詩人の知覚の形成にいかなる影響を及ぼしているのかがわかる。内的プロセスが知らず知らずのうちに詩人の知覚形成のすみずみにまで力を及ぼしていく。内的プロセスは詩人の生きている世界の色と形の形成に関わりつづける。まさにここで詩人における体験とファンタジーの関係がわれわれに明らかになりはじめる。詩的世界は，ある出来事から詩人が作品の構想を思いつくまえに，また詩人が作品の最初の1行目を書きとめないうちに，すでに存在する。この心的プロセスによってポエジーの世界が生じる過程，および個々の詩的世界が形成される過程の法則は，生の現実にたいしてどのような態度をとるかによって決まるのであって，そのような法則は経験の要素が認識の構成にあたえる影響関係とはまったく異なったものである」[30]。詩的ファンタジーとは，基本的なプロセスから内的な強い力によって詩的形象が高まっていく一連の流れをいう。そのファンタジーの特性は，「通常の生活や生の目的から離れた，知らず知らずのうちに法則に則った創作行為であり，心的力が満ち溢れて生まれる」[31]。

ディルタイにとってファンタジーは，無から有をつくりだすものではない。重要なことは，「ファンタジーのプロセスにおいてはつねに，具体的に体験された事実内容を別な世界につくり変えることであり，まったく新しい内容の創出ではない」。そしてファンタジーは，意志的であり，法則

的であり，創造的である。

4．Einbildungskraft と Phantasie—結びに代えて

Einbildungskraft と Phantasie はどのように違うのか。ディルタイの著作のなかからいくつか用例をとり上げて考察してみたい。なお引用の出典は，(D) は "Dichterische Einbildungskraft und Wahnsinn", (G) は "Goethe und die dichterische Phantasie" とする。

(1) Ich wahle eine der höchsten Leistungen des Seelenlebens, ……: die Einbildungskraft des Dichters. (D)
詩人の想像力は心的生の最高の成果

(2) Schon die Alten haben die Verwandtschaft zwischen der Einbildungskraft des Dichters und den Träumen, Halluzinationen und Wahnideen beobachtet. (D)
詩人の想像力と夢の類似性

(3) Ein Symptom höchst außerordentlicher Art, diese Einbildungskraft, welche einen solchen uns alle überdauernden und überragenden unsterblichen Menschen zu schaffen vermag. (D)
不滅の人間を創造できる想像力

(4) In völligen Gegensatz gegen diese Zustände zeigt uns die geniale Einbildungskraft eine freie Entfaltung der Bilder und ihrer Verbindungen, …… (D)
天才的想像力はイメージやイメージの結合を自由に展開させる

(5) So walten in den Werken der dichterischen Einbildungskraft psychologische Gesetze. …… (D)

詩的想像力が生み出す作品では心理的法則が支配

(6) Und aus dieser Gesetzmäßigkeit, mit welcher die Einbildungskraft in dem Dichter wirkt, …… (D)
想像力は法則に則って詩人のうちではたらく

(7) Aus diesen Vorgängen können nun die Selbstzeugnisse der Dichter über das Wirken der Einbildungskraft in ihnen verstanden werden. Der einfachste Fall, gleichsam das Urphänomen der Einbildungskraft, liegt in der Entfaltung der Bilder vor, welche Goethe an sich beobachtete. "Ich habe die Gabe, wenn ich die Augen schloß und mit niedergesenktem Haupte mir in die Mitte des Sehorgans eine Blume dachte, so verharrte sie nicht einen Augenblick in ihrer ersten Gestalt, sondern sie legte sich auseinander, und aus ihrem Innern entfalteten sich wieder neue Blumen aus farbigen, wohl auch grünen Blättern. Es waren keine natürlichen Blumen, sondern phantastische, jedoch regelmäßig wie die Rosetten der Bildhauer. Es war unmöglich, die hervorsprossende Schöpfung zu fixieren." (D)
想像力の原現象の事例としてのゲーテの言葉
「わたしには天賦の才があって，目を閉じこうべを垂れて視野の真ん中に一本の花を思い浮かべると，その花は一瞬たりともはじめの形にとどまることなく，ばらばらになり，そしてその花の内部からふたたび色とりどりの花弁や緑の花弁からなる新しい花が咲きでた。それは自然界にある花ではなく，空想の花であるが，しかし彫刻家のつくるロゼットのように均整がとれている。創造の息吹を止めることはできない」

(8) die Einbildungskraft, welche aus den gegebenen Elementen neue

Verbindungen herstellt,…… (G)
想像力は所与の要素から新しい結合をつくりだす

(9) wie es keine Einbildungskraft gibt, die nicht auf Gadächtnis beruhte, so gibt es kein Gedächtnis, das nicht schon eine Seite der Einbildungskraft in sich enthielte. (G)
記憶と想像力の相関関係

(10) Ich unterscheide nun zunächst hiervon das Wirken der Phantasie, in welchem sich eine von der Welt unseres Handelns unterschiedene zweite Welt aufbaut. So äußert sich die Einbildungskraft unwillkürlich in den Gebilden des Traumes, welcher der älteste aller Poeten ist. (G)
ファンタジーのはたらきによってわれわれの行為の世界とはちがう別の世界がつくられる
想像力は夢という形で無意識のうちに現れる。想像力は人間が現実のしがらみから自由になろうとするとき，生それ自体のなかに無意識的にもうひとつ別な世界をつくりだす

(11) Die Phantasie tritt als Wunder, als ein von dem Alltagstreiben der Menschen gänzlich verschiedenes Phänomen gegenüber, ist aber doch nur eine mächtigere Organisation gewisser Menschen, welche in der seltenen Stärke bestimmter elementarer Vorgänge gegründet ist ;… (G)
ファンタジーは人並みはずれた強力な構想力で，深い内的プロセスの強さがそのような構想力を生みだす

(12) Die Natur war ihm ein Allebendiges, bedeutete ihm Kraft zur Gestaltung, wie er sie in sich selber als schaffende Phantasie

erlebte. (G)
創造的ファンタジーは形成力

(13) In ihr (der bildenden Kunst) bringt die Phantasie das Typische in den Formen der Natur zu reiner Darstellung, und so setzt sie das unbewußte Schaffen der Natur in der Sphäre des Bewußtseins fort. (G)
ファンタジーは自然の無意識的な創造を意識の領域でつづける

(14) Es mußte die beständige Richtung seiner Phantasie sein, erlebte Wirklichkeit in das Poetische zu erheben. (G)
ファンタジーの不変の方向性は現実の体験を詩的世界に昇華すること

(15) Welches ist nun das Verhältnis zwischen der angesammelten Erfahrung und der frei schaffenden Phantasie,…… (G)
自由に創造するファンタジー

(16) Phantasie ist…in den ganzen seelischen Zusammenhang verwoben. (G)
ファンタジーは心的連関の隅々にまで織り込まれている

(17) In dem allem treten uns die Eigenschaften der dichterischen Phantasie in äußerster Stärke entgegen: ein unwillkürlich gesetzmäßiges, vom gewöhnlichen Leben und dessen Zwecken losgelöstes Schaffen aus der Fülle der seelischen Kräfte. (G)
詩的ファンタジーとは，通常の生活や生の目的から離れた，法則に則った創作行為

(18) Phantasie gewährte ihm immer wieder in der Dichtung zeitweilige Befreiung von der Unruhe seines Lebens, indem sie dies Leben in die Welt des Scheins erhob. (G)
ファンタジーはこの世の生を仮象の世界に引き上げる

日常語のレベルでは，Einbildungskraft は Vorstellungskraft や Phantasie や Imagination の類義語として使われているようである。ディルタイの著作のなかでも，Einbildungskraft と Phantasie を入れ替えてもおかしくないのではないかと思われる箇所がないわけではない。たとえば，「経験の蓄積とファンタジーによる自由な創造とのあいだに，形姿，状況，運命の再現とそれらの創作とのあいだに，どんな関わりがあるのだろうか。ある要素を決められたとおりに結びつけてそれをふたたび表象する観念連合と，ある要素から新しい結合をつくりだす想像力は，きわめて明快な境界線で互いに分けられているように見える」[33]という場合，「ファンタジー」と「想像力」を使い分ける必要があるのかどうか。しかしディルタイみずから「ゲーテの多方面にわたるファンタジーの中核は想像力であった」[34]と言っているからには，ファンタジーと想像力はどこかで明確に区別して使われているにちがいない。

用例に即して見れば，想像力は心的生によって生みだされたものであり，夢と似ていて，イメージを自由に展開させ，既存の要素を新たに結合させ，記憶と密接な相関関係をもち，生のなかに無意識的に別な世界をつくりだす。想像力とは何かを具体的によく表しているのは，（7）のゲーテの言葉である。これらすべてを勘案すると，想像力とは実際に個々の具体的なイメージをつくりだす力のことをいっていると思われる。

それにたいしてファンタジーは，日常とは異なる現象として現れ，自然と同じような形成力があり，自然と同じく創造的で，現実の体験を詩的世界に昇華させることができ，そして心的連関のなかにくまなく織り込まれている。

このように想像力とファンタジーの意味を並べて考えてみると，ファン

タジーは人間の本性の永遠に変わらぬ心的力に基づいていて，人間の心的生のなかに存在するなにかある創造的力で，強力な Organisation である。想像力が個別的に力を発揮するのにたいして，ファンタジーは想像力を手足のように使う総合的で根源的な力である。このように考えると，先に挙げた「ファンタジーによる自由な創造」と「新しい結合をつくりだす想像力」の場合，このファンタジーと想像力を入れ替えることは不可能である。まさしく想像力は個別的にイメージをつくりだす力であり，ファンタジーはもっと根源的な創造的力だからである。ディルタイは文学の規範をつくろうとしたとき，この詩的ファンタジーの創造的な力に着目したのであろう。あるいは逆に，文学の創造を考えながらファンタジーに詩的創造力を託したのかもしれない。

注

(1) Walter A. Berendsohn: Die Erforschung der dichterischen Phantasie. Theorie und Methodik im Abriß. タイプライター論文。成立年不詳。Deutsches Literaturarchiv in Marbach a.N.所蔵。S.1
(2) Karol Sauerland: Diltheys Erlebnisbegriff. Berlin 1972, S.58
(3) Ebenda, S.58
(4) Wilheim Dilthey: Die Einbildungskraft des Dichters. Bausteine für eine Poetik. Gesammelte Schriften Bd.VI Stuttgart 1958, S.103
(5) Ebenda, S.104
(6) Ebenda, S.104
(7) Ebenda, S.126
(8) Ebenda, S.126
(9) Wilhelm Dilthey: Dichterische Einbildungskraft und Wahnsinn. Rede, gehalten zur Feier des Stiftungstages der Militärärztlichen Bildungsanstalten am 2. August 1886. Leipzig 1886, S.7
(10) Ebenda, S.12
(11) Ebenda, S.12-13
(12) Ebenda, S.15
(13) Ebenda, S.28
(14) Ebenda, S.29
(15) Karol Sauerland, a.a.O., S.70

(16) Wilhelm Dilthey : Das Erlebnis und die Dichtung, zweite erweiterte Auflage. Leipzig 1907
(17) Wilhelm Dilthey : Das Erlebnis und die Dichtung, 16.Auflage. Göttingen 1985, S.5
(18) Ebenda, S.6
(19) Ebenda, S.124
(20) Ebenda, S.127
(21) Ebenda, S.127
(22) Ebenda, S.128
(23) Ebenda, S.128
(24) Ebenda, S.129
(25) Ebenda, S.127
(26) Ebenda, S.129
(27) Ebenda, S.130
(28) Ebenda, S.130
(29) Ebenda, S.130
(30) Ebenda, S.131
(31) Ebenda, S.136
(32) Heinz Nicolai : Wilhelm Dilthey und das Problem der dichterischen Phantasie. München 1934, S.156
(33) Das Erlebnis und die Dichtung. 16.Auflage. a.a.O., S.128
(34) Ebenda, S.125